ごはん (2)

火の勢いにつれてゴオッと凄まじい風が起り、葉書大の火の粉が飛んでくる。空気は熱く乾いて、息をすると、のどや鼻がヒリヒリした。今でいえばサウナに入ったようなものである。

乾き切った生垣を、火のついたネズミが駆け廻るように、火が走る。水を浸した※火叩きで叩き廻りながら、うちの中も見廻らなくてはならない。

「かまわないから土足で上れ！」

父が叫んだ。

私は生れて初めて靴をはいたまま畳の上を歩いた。

「このまま死ぬのかも知れないな」

と思いながら、泥足で畳を汚すことを面白がっている気持も少しあったような気がする。

こういう時、女は男より思い切りがいいのだろうか。父が、自分でいっておきながら①爪先立ちのような半端な感じで歩いているのに引きかえ、母は、あれはどういうつもりだったのか、一番気に入っていた松葉の模様の※大島の上に※モンペをはき、いつもの運動靴ではなく父の※コードバンの靴をはいて、縦横に走り廻り、盛大に畳を汚していた。母も私と同じ気持だったのかも知れない。

三方を火に囲まれ、もはやこれまでという時に、どうしたわけか急に風向きが変り、夜が明けたら、我が隣組だけが嘘のように焼け残っていた。私は顔中煤だらけで、まつ毛が焼けて無くなっていた。大八車の主が戻ってきた。父が母親を捨てた息子の胸倉を取り②小突き廻している。そこへ弟と妹が帰ってきた。

両方とも危い命を拾ったのだから、感激の親子対面劇があったわけだが、不思議に記憶がない。覚えているのは、弟と妹が救急袋の乾パンを全部食べてしまったことである。うちの方面は全滅したと聞き、お父さんに叱られる心配はないと思って食べたのだという。

孤児になったという実感はなく、おなかいっぱい乾パンが食べられて嬉しかった、とあとで妹は話していた。

（向田邦子『父の詫び状』文藝春秋　所収「ごはん」による）

※火叩き…竹竿の先に縄の束を付けた消火用具で、これで叩いて火を消す。
大島…大島紬。鹿児島県奄美大島などでつくられる織物。
モンペ…はかまの形をして足首の部分が絞られている衣服。労働着で、戦時中は女性の標準服としても推奨された。
コードバン…革の種類で、上質なめし革。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「爪先立ちのような半端な感じで歩いている」とあるが、父がこのような歩き方をしていたのはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア　周囲に火が廻っているので、畳の上に土足で上がるのを気にしている状況ではないから。

イ　三方を火に囲まれて身に危険がせまり、恐ろしさのあまり足がすくんでいたから。

ウ　靴を脱いで上がるべき畳の上を、土足のまま歩くことに気が引けたから。

［　　］

(2) ——線②「小突き廻している」とあるが、この動作から読み取れる「父」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　怒り　　イ　恐れ　　ウ　驚き

［　　］

(3) 本文の内容に**当てはまらない**ものを選びなさい。

ア　筆者の家は火に囲まれたが、急に風向きが変わったことで何とか焼け残った。

イ　筆者は、家族が生きながらえて再会できたときの、感動の対面の様子が印象に残っている。

ウ　筆者の妹は、うちの方面が全滅したと聞いても孤児になったという実感がわかなかった。

［　　］